様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２０ 日現在

機関番号：１２３０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７８０４８５

研究課題名（和文）学際的教育研究の可能性と課題：分析哲学の理性と規範に関する知見をベースとして

研究課題名（英文）The Potential and Challenges of an Interdisciplinary Approach to the Study of Education: Lessons from Recent Studies on the Nature of Rationality and Normativity in Analytic Philosophy

研究代表者
三澤　紘一郎（Koichiro, Misawa）

群馬大学・教育学部・准教授

研究者番号：２０６３６１７０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、貧困化・陳腐化する教育言説とは別の視点で教育という社会実践を捉えなおし、未来の教育を学際的に構想していく道筋をつけることを目指し遂行された。
　以下の二つが主な研究成果である。①：人間の生における理性と規範性について、「理由の空間」、「第二の自然」という哲学概念を中心に明らかにしたこと。②：それらの概念が、伝統的な教育哲学における議論や問題設定にもたらす影響の射程を究明したこと。

研究成果の概要（英文）：The main aim of this research programme was to make better sense of education as a ‘social’ practice and facilitate the development of the study of education as an interdisciplinary enterprise, as opposed to confining the notion of education to a merely technical and instrumental as well as constrained and impoverished one. The results from this three-year project are the following: 1) that it is only through the ideas of ‘the space of reasons’ and ‘second nature’ that one can apprehend what is usually apprehended as ‘rationality’ and ‘normativity’ in the life of human beings, and 2) that these ideas have a rich bearing on the way such issues as rationality and normativity are addressed in philosophy of education.

研究分野：教育哲学、分析哲学

キーワード：理性　規範性　学際性　哲学研究と実証研究　ジョン・マクダウェル　デイヴィド・バクハースト　理由の空間　第二の自然

１．研究開始当初の背景

（1）学問の高度専門化による細分化と総合的な視点の欠如という問題は、教育研究に（も）典型的に表れている。さまざまな学問の手法を持ち寄った研究者が教育研究に従事しているという点では、教育研究の分野はすでに「学際的」であるが、その「学際性」は寄り合い所帯的であり、領域横断的な視点が欠けている。

（2）理性や規範性といったテーマは、（純）哲学においても、教育哲学においても中心的なテーマのひとつであるが、これもまた主として学問の制度・組織化、細分化の影響で、双方の議論があまり交わらないまま展開してきた。

（3）しかし、David Bakhusrt の *The Formation of Reason* (2011) や Jan Derry の *Vygotsky, Philosophy and Education* (2013) など、John McDowell や Robert Brandom らが分析哲学において／を超えて、展開している理性や規範性に関する議論を、「教育」という観点に特に着目しながら読み解く論考が現われてきた。

（4）そこで研究代表者は、さまざまな実証研究が大量に生産されている教育研究という領域を、より包括的・学際的に捉えなおす視点を（教育）哲学研究の理性と規範性をめぐる議論から構築していくことを目指した。

２．研究の目的

（1）単純化された経済用語や粗雑な道徳・倫理言説によって切り取られた「今・ここ」に見えている情報にのみ基づく、貧相な語り口から教育を救い出すこと（教育研究を数の上では独占しているともいえる実証研究・科学研究の中には、安易にこのような貧相な語り口に依拠している―さらに悪いことにはそれを助長している―ものが珍しくない）。

（2）諸教育研究において思い思いに使われているか、またはそれぞれが暗黙の裡に前提としている、人間の生の理性と規範性のありようを徹底的に明らかにすることで、教育研究者間のより建設的な対話を可能とすること（錯綜する「規範」や「理性」に関する議論の問題設定を整理し、実証研究と理論研究を建設的な対話の土壌に乗せること）。

（3）Wilfrid Sellars、McDowell、Brandom らが展開している「第二の自然」や「理由の空間」といった概念をめぐる議論が、伝統的な教育言説に何をもたらし何をもたらさないのかを明らかにすることで、「新しい哲学概念の教育言説への示唆」という以上の実質的な探求領域を策定し、哲学研究と教育哲学研究の乖離の解消の道も探る。

３．研究の方法

（1）研究の主な手法は文献精読である。対象となる文献は､以下の 4 つの分野にわたる。①分析哲学関連、②教育哲学関連、③教育研究関連、④学際研究関連。

（2）また、本研究は先行研究者の数がそれほど多くない研究プログラムであるため、数少ない先行研究者（上述の Bakhurst や Derry）との直接の交流・対話からも得るところの多い研究である。

（3）（1）で挙げた、4 つの領域のそれぞれにおいて（論文投稿や学会発表などを通じて）研究の方向性や成果を示すことも、既存の制度化・組織化された学問知の枠をまたぐという点で肝要である。

４．研究成果

本研究期間内に掲載された学術論文（下記 5 の「雑誌論文」（1）－（8）の概要を略記することで、研究成果の報告とする（本項目のナンバリングは 5 の項目のナンバリングに対応）。また（9）において、本研究を踏まえたうえでの今後の展望を示す。

（1）教育哲学という学問の学問的特質と位置づけに関しては、多くの議論がなされてきている。本論文は、「哲学的厳密さ」と「教育（実践）への関連性」を、（個々の教育哲学者の仕事としでではなくとも）学問領域全体としては両立させ、「教育哲学」という個別学問に自閉せず、教育の世界にも哲学の世界にも通じる回路を担保することの重要性を強調した。教育研究における各個別の学問領域（academic disciplines）の構成者にとっては、各々のテーマだけではなく、「だれが自分の仕事の audience か?」という視点が通常意識されている以上に重要であることを論じた。

（2）編者らの「教育哲学は、本流の哲学から派生する応用哲学や実践哲学ではない」という主張は本研究のプロジェクトとも親近性のあるものである。ただし、「広義の教育概念は哲学問題の中心を占める」という主張に関しては、政治哲学や言語哲学との関連を探りながら、留保をつけざるを得ない面が残る。

（3）本論文は、人間の知識を構成する主要概念である合理性、規範性、正当化をめぐる哲学的考察を基に、教育と哲学の内在的な、しかしこれまで光が当てられてこなかった側面を明るみに出すことを目指したものである。マルティン・ハイデガーと（より全面的に）ヒラリー･パトナムの議論を軸として、ハーヴィ・シーゲルの近代認識論擁護に対して批判的検討を行った。導かれた結論は、人間が知識をもちうるということはすでにある種の社会性を伴っているという論点である。ただし、本論が明らかにする「社会性」は基本的に超越論的論点であり、多くの社会科学研究や「質的研究」に見られる社会構成主義（の亜種）とは一線を画する。（ただし、本論文が顕在化させようとした「社会性」についてのさらなる探求は今回の研究プロジェクトの範囲を超えたものであり、詳細な分析・検討を要するものである。）

（4）本論文は、「規範性をもった自然的存在」

である人間をどのように説明できるのかという、人類が長い間抱えてきた問いを、ジョン・マクダウェルが照射する「第二の自然」という概念を手掛かりにして検討した。本論文は、第二の自然（理性）を第一の自然（動物性）に還元することも、その逆もできないということをマクダウェルと、マクダウェルに異を唱えるアラスデア・マッキンタイアの議論を対置させながら明らかにした。「第一の自然」-「第二の自然」が截然と分かれているという想定にはいくつもの難点があり、「第一の自然」のみを（科学的）学問の対象に据えるだけでは不十分であることを指摘し、「第一の自然」を「第一の自然」たらしめている「第二の自然」への適切な理解がなければ、人間をめぐる多くの研究（特に教育研究）は科学主義へと陥ってしまうことを論じた。

（5）多文化教育はその意義を広く認められているにもかかわらず、その重要性は学問的というよりは政治的・道徳的な理由によって認識されているケースが多い。その原因として、①多文化主義と文化相対主義が頻繁に結び付けられていること、②多文化主義は他の知的伝統との接点があまりないことがたびたび挙げられる。本論文では、この二つにはどちらも薄弱な根拠しかなく、多文化主義のもたらす知見は、今後の人類全体の方向性を考える際のキーとなることを論じた。

（6）本論文は、アリストテレスに端を発し、近年マクダウェルが再び息を吹き込んでいる「第二の自然」という概念に焦点を当てることにより、「第二の自然」がもつ倫理的、教育的な潜在重要性を明るみに出すことを主眼に置いた論文である。その方途として、「第二の自然」に付きまとう三つの批判―（1）観念主義である；（2）人間中心主義である；（3）「第二の自然」は自明である―に対して、それぞれ再論駁が可能であることを論証した。

（7）本論文では、社会学者スティーヴ・フラーが主導する「（社会学的）社会認識論」を、分析哲学の流れの中から出てきた分析的社会認識論と対置させながら、その学際的教育研究への貢献という観点から検討した。フラーの社会認識論の三つの大きな柱である、知識の（1）自然的側面、（2）規範的側面、（3）制度・組織的側面をそれぞれ批判的に分析し、その特長と難点を明らかにした。フラーの社会認識論は、分析的社会認識論が見過ごしがちな知識の社会的条件に目配りが行き届いているという点で、豊饒な可能性をもつものであるが、同時に規範に関する哲学的な論点をフラーの側も見過ごしている部分があり、フラーが描く社会認識論の教育への応用には改善すべき点が残っていることを指摘した。

（8）「なぜ哲学者と教育者は話をしないのか？」というルネ・アルシラの多くの議論を巻き起こした論文を出発点として、教育哲学の学問的特質と、その貢献先について考察した。その手掛かりとして本論文では、 デイヴィド・ブリッジズが導入した哲学と教育研究の関係をめぐる三つの区分：（1）教育研究について哲学すること（philosophising about educational research）；（2）教育研究として哲学すること（philosophising as educational research）；（3）教育研究の中で哲学すること（philosophising in educational research）に依拠しながら、教育哲学者が教育界と哲学界から遊離して教育哲学界に内向することを押しとどめるあり方を提案した。

（9）ますます多様化し細分化していく学問の専門領域とそこで生み出される学術成果や知見を、俯瞰するとまではいかなくとも、ある程度意識的に横断できる道筋をつけることが求められている現在、本研究のプロジェクトは、研究代表者にとっての知的関心のみならず、現代的意義を少なからずもつものであるという感触を得た（特に、Richard Peters と Israel Scheffler という、英米の教育哲学を組織・制度化し「教育哲学」という学問分野を築き上げた第一世代の旗手である二人がここ数年のうちに世を去ったという事実は、「教育哲学」という学問の自立性と、隣接学問との関係に対する再考を改めて迫ってくる）。

このように、大局的には本研究のプロジェクトは目指すべき価値のある行路を辿ってきたと思われる。しかしながら、それをさらに前進させるためには、本研究が取り組みつつも、詳細な検討にまでは手が回らなかったテーマをさらに分析・吟味しなければならないことも明らかになった。その主要なテーマ（の一つ）が、「nature（自然／生まれ）－nurture（規範／育ち）」という二元論、あるいは（今日よくみられる）折衷論を、「第二の自然の自然主義」から捉えなおし、人間本性に関わる哲学的な問いと人間形成に関わる教育的な問いを、有機的に含み込む文脈を明らかにすることである。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）

(1) Koichiro Misawa, (2016, 受理済み) ‘No Need to Worry: Multiple Profiles of Philosophy of Education in, and in Relation to, the World of Education and the World of Philosophy”, *Philosophical Inquiry in Education: The Journal of the Canadian Philosophy of Education Society*, 24, ページ番号未定, 【査読

有】URL: http://journals.sfu.ca/pie/index.php/pie

(2) Koichiro Misawa, (2015) 'Review of *Stanley Cavell and the Education of Grownups*', Naoko Saito and Paul Standish (eds) *Stanley Cavell and the Education of Grownups* (Fordham University Press, 2012), *Educational Studies in Japan: International Yearbook*, 9, pp. 99-102. 【査読無（依頼書評論文）】

(3) Koichiro Misawa, (2015) 'Harvey Siegel on Epistemology and Education: Rationality, Normativity and Justification', 『東京福祉大学・大学院紀要』6(1), pp. 19-29. 【査読無】URL: https://gair.media.gunma-u.ac.jp/dspace/bitstream/10087/9662/1/%E7%B4%80%E8%A6%81_Vol6-1_%EF%BD%9019%E5%8E%9F%E8%91%97%E8%AB%96%E6%96%87_%E4%B8%89%E6%BE%A4.pdf

(4) Koichiro Misawa, (2014) 'Animality and Rationality in Human Beings: Towards Enriching Contemporary Educational Studies', *Cosmos and History: The Journal of Natural and Social Philosophy*, 10(2), pp. 182-196. 【査読有】URL: http://cosmosandhistory.org/index.php/journal/article/viewFile/399/741

(5) Koichiro Misawa, (2014) 'On the Benefits and Burdens of the Notion of "Standpoint"', *Philosophy Study*, 4(5), pp. 334-344. 【査読有】URL: http://www.davidpublishing.com/journals_info.asp?jId=2019

(6) Koichiro Misawa, (2014) 'Nature, Nurture, Second Nature: Broadening the Horizons of the Philosophy of Education', *Educational Philosophy and Theory*, 46(5), pp. 499-511. 【査読有】DOI: 10.1080/00131857.2012.762504

(7) Koichiro Misawa, (2013) 'A Critical Analysis of the Educational Impact of Steve Fuller's Social Epistemology', *Philosophy Study*, 3(9), pp. 867-879. 【査読有】URL: http://www.davidpublishing.com/journals_info.asp?jId=1732

(8) Koichiro Misawa, (2013) 'On the Place of the Philosophy of Education in Educational Research', *Proceedings of the International Conference 'Reviewed? Renewed? Revisited! Past, Present, and Future of Philosophy and History of Educational Research*, pp. 131-138. 【概要のみ査読有】

〔学会発表〕（計 5 件）

(1) Koichiro Misawa, 'Rethinking the Meaning of "Social" in Educational Research: On What We Call the World and the Scheme-Content Dualism', at the 50th Annual Conference of Philosophy of Education Society of Great Britain (Oxford, U.K., March 26, 2015). （第 50 回英国教育哲学大会、オックスフォード大学）

(2) Koichiro Misawa, 'Animality and

Rationality in Human Beings: The Role of Philosophy in (and in Relation to) the Human Sciences', at an invited seminar (Department of Philosophy, Queen's University, Canada, March 14, 2014).（招待発表、クイーンズ大学、カナダ）

(3) 三澤 紘一郎, 齋藤 直子, Paul Standish, 飯田 隆, 小野 文生「『自己を超えて』―哲学のサブジェクト転換―」第 23 回教育思想史学会 （司会）、2013 年 9 月 15 日、 慶應義塾大学

(4) 三澤 紘一郎「教育研究と哲学の関係：教育哲学の貢献先をめぐって」第 72 回日本教育学会、2013 年 8 月 29 日、一橋大学

(5) Koichiro Misawa, 'On the Place of the Philosophy of Education in Educational Research', at the International Conference 'Reviewed? Renewed? Revisited! Past, Present, and Future of Philosophy and History of Educational Research' (Katholieke Universiteit Leuven, Belgium, June 8, 2013). （ルーヴァン・カトリック大学, ベルギー）

６．研究組織
(1) 研究代表者

三澤 紘一郎（MISAWA, Koichiro）
群馬大学（教育学部・准教授）
研究者番号：20636170